黒の来訪者

傑作サスペンス

笹沢左保

BIG NOVEL

〈無検印承認〉

黒の来訪者　　定価680円

著　者　笹沢左保

発行者　土井　勇

発行所　株式会社　青樹社

〒101 東京都千代田区三崎町2—6—7
電話 東京 (03) 264—6902・264—6904
振替　東京 (1) 47648

落丁・乱丁本はお取り替え致します

ISBN4—7913—0258—3

赤い不訪者

笹沢左保

BIG BOOKS

青樹社

目次

黒の来訪者　五
死の来訪者　四〇
霧の来訪者　九〇
朝の来訪者　一四五
砂の来訪者　一九三
声の来訪者　二四〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

黒の来訪者

1

最初にそれを感じたのは、八月の末のことである。場所は、長野県の軽井沢だった。義母の知人の別荘に招かれて、二泊三日の予定で出かけたのであった。織江はひとり息子の和義を、連れて行った。もちろん、義母も一緒だった。

里見織江は、二十九歳である。色が白くて、目がパッチリと大きかった。織江の魅力のポイントは、その目にあった。鼻とか唇とかには、何の長所もない。彼女自身、そう思っていた。とにかく、目が大きい。唇と、同じくらいである。

睫毛も長かった、白目が青味がかっている。大きな目には、表情というものがある。あるときは、愛嬌のある目になった。またあるときは、ひどく神秘的な目の表情を見せる。喜怒哀楽を豊かに、その目が表現するのであった。

織江はよく、チャーミングだと言われる。若く見える、魅力的だなどとお世辞を言われることもあった。織江はそれはみな、目のせいだと思っている。小柄な身体つきだし、若向きのヘア・スタイル

でいると二十四、五に見られた。
ひとりでいれば、娘だと思われる。結婚の経験があることを初めて知った者は、へえっと驚いたりする。小学校三年の息子がいると言っても、本気にする人間はまずいない。ましてや未亡人だなどと言おうものなら、冗談だろうと誰も相手になってくれなかった。
息子の和義と一緒にいて、母子に見られたことは一度もない。甥だと紹介したほうが、相手は素直に頷いてくれた。若く見られたり魅力的だと言われたりすれば、確かに楽しかった。しかし、ただそれだけのことである。織江は女としての将来を、すでに捨てていたからだった。
つまり、再婚の意志が、ないのである。理由は、いくつかあった。まず、小学校三年の息子がいることも、そうだった。それから義理の両親が、実の娘に対するように、よくしてくれることも理由の一つに数えられる。それに、面倒臭かった。
現在、織江に好意を寄せている者もいた。死んだ夫の従弟(いとこ)である小田切哲男が、そうであった。小田切哲男とは、夫が生きているときから親しかった。彼は三十三歳で、大手の新聞社に勤めていた。身内という観念があるから、小田切が相手だと織江はかなりキワドイ話をすることができた。
それだけに、小田切から思い切って結婚しないかと言われたとき、織江はいささか面喰らった。小田切哲男は陽気な性格で、よく冗談を言った。織江はまた、その冗談かなと思った。だが、結婚しようなどという悪い冗談は、およそ小田切らしくなかった。
「哲男さんと夫婦になるなんて、馬鹿みたいだわ」
織江は照れ臭くなって、のけぞってケラケラと笑った。

「馬鹿みたい、とは失礼だな」
小田切は、苦笑を浮かべた。
「だって……」
織江は、笑いながら、小田切の背中を叩き続けた。
「何もそんなに、笑うことはないだろう」
小田切は、眩しそうな目をした。
「考えれば考えるほど、おかしくなってしまうわ」
「そうかな。織江さんの再婚の相手には、ぼくが最適だと思っていたんだけどね」
「わたし、再婚なんてしないつもりよ」
「どうしてだい。織江さんはどう見ても、二十四、五だ。つまり、結婚適齢期っていうわけさ」
「今更結婚だなんて、億劫なのよ」
「そんなことを言って、もったいないじゃないか」
「もったいないだなんて、いやねえ」
織江は、小田切を軽く睨んだ。織江には、男が女に言う『もったいない』と意味がわかっていたのである。
「ぼくは、事実を言っているんだ。織江さんがこのまま禁欲生活を続けるなんて、とんでもない間違いだよ」
小田切は、熱っぽい目で織江を見据えた。

「まあ、禁欲生活だなんて、失礼だわ。わたし、変な欲望なんてないし、我慢もしていませんからね」
そう言ってから、織江は一瞬、頬を染めた。欲望がないはずはないし、我慢していないという言葉にも多少の嘘があったからである。
「とにかく、身体に毒だ。美容の点でもマイナスが多いし、精神衛生上もよくないんだからね」
と、小田切はすでに、冗談の多いいつもの彼に戻っていた。
「精神衛生上、どんな影響があるのかしら」
今度は織江のほうが、やや真剣になっていた。
「あなたは、禁欲生活に耐えている。自然の摂理に逆らっているんだ。すると人間は無意識のうちに、別な形で欲望を発散させるようになる。幻覚と幻聴とかが、その前兆で一種の精神病になる恐れもある」
もっともらしい顔で、小田切はそんなことを言った。織江は、それを信じたわけではなかった。だが最初にそれを感じたとき、織江が真先に思い出したのは、その小田切の言葉だったのである。
《誰かが、わたしを見ている》
織江はそう感じて、これは小田切が言っていた幻覚ではないのかと、思ったのであった。人に見られることは、幾らでもある。無遠慮にジロジロと視線を向けて来る者もいるし、さりげなく見ていて目をほかに転ずるというのもいる。
そのように見られているのなら、少しも珍しくはない。日常茶飯のこととして、気にもかけなかっ

た。ところが、織江がそのとき感じた視線というのは、そんなものではなかったのである。その視線を意識した瞬間、もう一時間も前からずっと見られていたような気がした。

そのくらい、熱っぽい目に感じられたのだった。身体にからみつくように、ネバっこかった。しかも、強烈だった。単なる視線ではなく、電流のように伝わって来る何かがあった。執念みたいなものかもしれない。織江は、背筋に悪寒を覚えた。

軽井沢駅の切符売場だった。明日は、東京へ帰ることになっている。その切符を、買いに来たのであった。織江は、ひとりである。白いワンピースにサンダルをはき、財布を持っただけの軽装であった。軽井沢駅の構内には、大勢の人がいた。

八月も末になると、夏の避暑地の日々を楽しんだ人々と、去り行く夏に名残りを惜しんで遅ればせながら軽井沢へやって来た者との交替の時期に当たる。それだけに、軽井沢駅も混雑するのだった。着ているものは夏であったが、日焼けした若者たちの顔はすでに秋に向けられていた。

大勢の人がいて、しかも正午をすぎたばかりである。そのために視線の主に対して、現実的な恐怖感はなかった。だが織江の胸には、奇妙な不安が芽生えていた。視線の主が男であると、はっきりわかっていたからである。男であることが、不安なのではない。

目で確かめもしないのに、どうして男だということがわかるのか。そうした自分自身が、不安だったのだ。小田切に言われた通り、一種の精神病者になりつつあるのかもしれない。その前兆の幻覚として、男にじっと嘗められているように感じるのではないか。

そう思いながら、織江は切符売場の前を離れた。いや、そんなはずはないと、織江は気をとり直し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

た。幻覚ではない。実際に、誰からか見られていたのだ。視線を背中と横顔に、はっきりと感じたのである。

男だと判断したのは、あまりにも熱っぽい視線だったからに違いない。しかし、だとするとその男とは、いったい誰なのだろうか。通りすがりの見知らぬ男が、あんな執念のこもった目を向けて来るはずはない。やはり、織江の知っている男なのだ。

だが、軽井沢などに、知り合いはいなかった。それに、知っている男なら、声をかけて来るだろう。偶然ここで織江を見かけたのなら、尚更のことである。織江はひとりだし、声をかけるのに遠慮はいらなかった。しかし、その男は近づいても来なかったのだ。

織江は、駅の構内をさりげなく、見渡していた。大勢の男女が、それぞれのポーズで、立っていたりすわっていたりした。グループの若者もいれば、ひとりだけの旅行者もいた。誰が視線の主なのか見分けることなど、とても不可能であった。

織江は、駅を出た。眼前が急に、白くなったように感じられた。直射日光に、カッと照らされたからだった。紺碧の空には、雲一つなかった。小浅間が、緑に着ぶくれたような姿を見せていた。

駅前の小さな広場に、バスとタクシーが停まっていた。その向こうを、国道十八号線が通っている。信号が赤で、何台かの乗用車が列を作っていた。織江は駅前の広場を、横断歩道のほうへ向かおうとした。そのときである。織江は再び、自分に向けられている例の視線を感じた。

今度は、それほど人の多い場所ではなかった。斜め左から視線が向けられていると、はっきりわかった。躊躇せずに織江は、その視線を追った。殆ど同時に、人影がバスの陰に隠れた。一瞬の印象で

は、それが誰であるかはわからなかった。
だが、間違いなく男であった。黒いレンズのサン・グラスをかけていた。そのほかの背恰好や人相、髪の形、年齢といったものについては、見定める余裕がまったくなかった。織江は、バスの向こう側に回ってみようと思いついた。
だが、織江が歩き出す前に、バスは発車していた。バスが走り去ったあと、その向こう側に人影はなかった。いまの男は、発車直前のバスに乗り込んだのだ。これで、男の正体は完全にわからなくなった。しかし、男に見られているということは、やはり幻覚ではなかったのである。
里見織江の場合、これだけですめば何ということはなかったのだった。変わった体験をしたというだけで、それも間もなく記憶から消えたことだろう。織江も東京へ帰って来てからは、例の男のことを一度も思い出さなかった。
しかし、九月の半ばすぎになって、織江は再び同じことを経験したのだった。場所は、東京新宿のデパートであった。織江は九月にはいって、初めて外出したのだった。定休日の翌日であり、正午すぎという時間のせいもあって、デパートはかなり混雑していた。
そのとき織江は、三階の婦人もの売り場にいた。下着類を主とした売り場であって、通路はぼんやりしていると押し流されそうに女たちの行列で埋まっていた。その中にいて織江はふと、誰かに見られていると感じたのである。織江は、ハッとなった。
初めてのときと違って、戸惑うことはなかった。織江は反射的に、軽井沢駅での経験を思い出していた。まったく同じ視線に、感じられた。熱っぽく粘り気がある視線で、それには執念のような激し

い感情がこめられているのであった。
織江は、斜め左のほうに視線の主の姿を捜し求めていた。その方向からの視線を、感じたからだった。婦人ものの、それも下着類の売り場である。成人男子は、あまり来たがらない場所だった。だから男がいれば、すぐ目につくはずであった。
その方向には、正装したマネキン人形がずらりと並んでいた。そのマネキン人形の陰に消えた男の姿が、チラリと織江の目に触れた。またしても、顔を確かめることはできなかった。ただ黒いものが、織江の印象に残った。それが黒い背広だったのか、それともシャツなのかもわからなかった。
織江は、人を掻き分けて、マネキン人形が並んでいるほうへ急いだ。だが、意地悪なもので、急いで前へ進もうとすると、人波は逆にそれを許さなかった。前に立ち塞がって、動こうとしない女もいた。無理に進むと、いやな顔をされたり侮蔑する目で睨まれたりであった。
ようやく通路を曲がって見通しの利くところに立ったときには、男の姿などまったく見当たらなかった。織江は落ち着けなくなっていた。織江に魅せられた男が、じっと睨めていたというようなことではなかった。また、行きずりの情事の相手を求めているプレイ・ボーイといったものでもない。
同じことが、二度あったのである。その場限りの出来事として、片付けられそうにはなかった。相手は、同じ男なのだ。二度とも、織江が気づくと素早く姿を消した。最初は黒いサン・グラス、二度目は黒い服が目についた。黒が好きな男だった。
もちろん、偶然ではない。同じ男であれば意識的に織江の行動を追い、物陰からじっと睨めていると解釈するほかはなかった。しかも最初は軽井沢で、二度目は東京である。いずれも織江が、ひとり

で外出したときに限られている。かなり、計画的だった。
悪戯心や酔狂で、できることではなかった。それもただ、監視しているというのではない。あの視線には、何か深い意味がこめられている。いったい、何者なのだろうか。それに、何が目的なのか。織江はそう考えてから、背筋が冷たくなるのを覚えた。

2

里見家は、杉並区の堀ノ内にある。古くからある家で、敷地が千坪ほどあった。母屋は古色蒼然としていた。純和風の造りで、いかにも屋敷という感じだが、老朽家屋の観は免れなかった。しかし、里見周一郎はこの古い家がひどく気に入っていて、死ぬまで新築や改築はしないと言っている。
そこには、里見周一郎と妻の京子が住んでいた。周一郎は六十八歳で、私立大学の文学部の教授である。京子は、六十歳だった。夫婦揃って、もの静かでやさしく、おっとりとしていた。老夫婦だけの住まいにしては広すぎたが、周一郎も京子もその閑散とした雰囲気を楽しんでいるようだった。
それに大きな目をした明るい嫁と、和義という小学生の孫の存在が、老夫婦を寂しい心境へは追いやらなかった。ほかに通いの家政婦が週に二回、小田切哲男が十日に一回、植木屋が月に一回ぐらい、この家に出入りしていた。
織江も終日、母屋で過ごした。嫁としての義務感からではなかった。家族の一員として、誰かと一緒にいたかったのである。夜遅くなって、おやすみなさいを言ってから織江は別棟のほうへ引き揚げるのだった。その別棟は、母屋からかなり離れていた。

周一郎の趣味として、庭には手入れが行き届いている。一カ月に一度、植木屋が見に来るのもそのためだった。玄関を出て、飛び石伝いに池や築山を迂回する。母屋とは反対側の庭の一隅に、その別棟の建物があった。ひとり息子の和彦が結婚するための新居として、十年前に建てたものだった。

鉄筋の二階建てで、小ぢんまりとした四角い家であった。階下に居間と応接間、ダイニング・キッチンに浴室とトイレがある。二階は書斎と、織江の部屋を兼ねた広い寝室であった。いまでも夜は、ここで眠った。和義が母屋で京子と床を並べて寝るようになったので、織江はひとりで夜を過ごした。

風呂は、母屋ではいって来る。だから、別棟のほうの浴室は、この数年間使ったことがなかった。織江は湯上がりにネグリジェだけをまとって、母屋から引き揚げて来た。二階の寝室へはいると、ガウンを着込んだ。寝室の様子は、和彦が生きていた頃と大して変わっていなかった。

ただ、ダブルのベッドを、シングル二つに変えただけである。片方は、和義のためのベッドだった。だが、和義が母屋で寝るようになってからは、そのベッドも遠く壁際に片付けてあった。織江は、椅子にすわった。まだ九時をすぎたばかりだった。

寝るには、早すぎた。テレビは、見たくなかった。レース編みでもしようかなと思ったが、何となく億劫である。窓の外を見やった。五、六年前にできた団地が、無数の窓の明かりを見せている。生活の灯という感じで、幸福の館だと織江はいつも思う。

あそこには、夫と妻と子どもがいる。織江はふと、ぼんやり考え込んでしまうことがある。団地のある夜景を見るときの織江は、やはり孤独であった。楽観的な織江だから、深刻にはならない。昼間

は、まるで忘れている。目のあたりこの夜景を見たときだけ、織江は女としての自分を考えるのだった。

今日の昼間の新宿のデパートでの出来事を、織江は思い出していた。男にじっと瞶められることを期待しているわけではないが、三度目の経験があるかどうかを考えずにはいられなかった。奇妙なことだし不安も感じている。しかし、不思議なことにあの視線に突き刺されることが、少しも不快ではなかったのである。

それは多分、あの男に危害を加えるという気がないからだろう。視線は熱っぽく、激しいものが感じられる。だが、それには憎悪や恨みの感情は、こめられていないのだ。少なくとも、織江に危害を加える男の目ではなかった。

映画やテレビで見る殺し屋というのは、よく黒い背広を着て黒いサン・グラスをかけている。しかし、自分が殺し屋に狙われるはずはないと、織江は苦笑しながら思った。命を狙われる心配だけはなかった。織江を殺して、利益を得られる者はいないのだ。

興信所の調査員や私立探偵、ということも考えられない。身許や素行を、調べられる理由がないのである。それに興信所の調査員が、気づかれるまでじっと瞶めているというようなことをするはずはない。やはり個人的に、織江と繋がりを持つ男なのだ。

しかし、そんな男が果たして、いるだろうか。男とは、殆ど縁のない織江であった。それを平凡と言えるかどうかはわからない。とにかく、織江には青春とか娘時代とかいうものが、なかったのである。従って、男と知り合うチャンスもなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton